

ボーダーから奄美を考える

③

岩下明裕

された日本島嶼学会の国境フォーラム「奄美・徳之島で考える『日本』の境界」のことが書いてある。2007年、事務局長を務めていた長嶋俊介さん（鹿児島大学）から、（台湾との交流を模索する）与那国島で学会の大会の柱として

古代から近代を経て現代に続く歴史の中で、それは同じ空間を意味していない。奄美こそかつては「日本」の外であり、「日本」のうちに入った後も、ボーダーによって翻弄されてきた地域であるからだ。こうして泉芳朗に関する

だ。理由はシンプル。屋良さんこそ、米軍海兵隊の普天間移転、つまり辺野古問題を追いかけてきた第一人者であり、海兵隊が居直る理由としてよく言われる戦略的観点からの「沖縄の地理的優位性」の嘘を告発した方だからだ（『砂上の同

ビバ！ 徳之島

今年2月、鹿児島市内のジュンク堂を訪ねた。訪問に備え、奄美の新しい本を買うためだ。

本紙の連載がもとになった『国境27度線』（海風社）が目についた。ボーダーの問題に取り組んでいる私にとって魅力的なタイトルだ。

バラバラめくって驚いた。2011年9月に開催

「国境フォーラム」の組織を頼まれた。次は奄美でもと言われたとき、私は興奮した。

琉球と薩摩の狭間にある「日本」の内なるボーダーの現場で議論ができる。一口に「日本」と言っても、

著書を書いたばかりの若手研究者を軸に据え、鹿児島と沖縄から報告者を招請することにした。鹿児島大学からは平井一臣さんに声をかけ、ビデオ出演となった。海兵隊の徳之島移転が政治の争点になっていたことは皆さん、覚えているだろう

国境フォーラムの模様は<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/BorderStudies/essay/s1/ive/pdf/Borderlive8.pdf>



特集：国境（くにがわ）フォーラム「奄美・徳之島で考える『日本』の境界」

日本島嶼学会奄美大会
国境（くにがわ）フォーラム「奄美・徳之島で考える『日本』の境界」

会場 北スラブ研究センター・グローバルOGEプログラム（鹿児島県庁議会議事室）
期日 2011年2月23日 18:00～19:00
主催者 岩下明裕（鹿児島大学）
パネリスト 中野浩一（鹿児島大学、OGE専攻）
司会者 岩下明裕（鹿児島大学）
後援機関（共催） 奄美市（共催）
コメンタリー 岩下明裕（鹿児島大学）

（隠れた理由がもう一つ。那覇で仕事をしている沖縄の人の多くは奄美にあまり関心がない。屋良さんを通じて、奄美を発信してもらおうという下心）。その屋良さん、新聞社を辞めてぶらぶらしていたが、デニー玉

省職員がいつものように「沖縄の地理的優位性」を持ち出してきた。米国本土、ハワイ、 Guam などと比較して「沖縄は東アジアに近いです」と。そこで屋良さんは、米国本土やハワイとの比較なら、日本列島どこでも「地理的優位」ではないかと訊いてみたとか。職員の答えは「他県も同じ」。え、じゃあなんで海兵隊は

沖縄にいる必要があるんだろう!?

で、沖縄の基地の7割を使う海兵隊の役割の一つとして、職員は島嶼防衛をあげたそう。誰かが訊いた。「この島を守るの?」。職員はマイクをもったままフ

リーズ。「そりゃ、尖閣じゃないの」。でも言えない。中国が怖いのか? いやいや、中国と仲良くしたい大物政治家（自民党外交部会などの習近平の国賓来日についての中止決議に怒った人）や、首相秘書官と補佐官を兼務する官邸官僚のボス（小中学校の一斉休校などコロナ対応も含めて首相の政策のほとんどを決めている人）が怖いのだろう。

でも、こういう質問を屋良さんしかしないってのが問題だと、私は思った。なほっと生きてると、奄美にも米軍基地が来ちゃうかも。

（北海道大学）